

No	提 案 名	提案団体名	
		代表者氏名	所 属
15	駅東＝宇都宮のシンボル化計画 ～つくろうよ 緑地と交流 駅東～	宇都宮大学 教育学部	陣内研究室
		吉澤 彰平	宇都宮大学 教育学部
		指導教官 氏 名	陣内 雄次

1 提案の要旨

人口減少時代においても都市の活力を保つためには、交流人口と定住人口を増やすことが必要である。そのためには都市の魅力を高めなければならない。そこで我々は駅に注目した。“駅”とは言わずと知れた都市の顔である。都市を訪れる人の第一印象は駅、及び駅前空間と言っても過言ではないのだ。

宇都宮市の場合はどうだろうか。JR 宇都宮駅西口を見てみると、景観形成重点地区ということもあり、北関東最大の 50 万都市に恥じない高層ビルが密集した、いわゆる都会的空間が形成されてはいるものの、特徴的な建物や空間がなくインパクトには欠ける。要するに西口には印象強い“シンボル”と言えるものが存在しない。一方で東口を見ると、餃子店を中心とした駅前イベント広場が整備されており、“餃子のまち”としてのシンボルが存在することは確かだが、今後その宮みらい地区で予定されている LRT 事業の関係で撤去されることを考えると、東口にも将来的にはシンボルが無くなってしまふ。だからこそ我々は、宇都宮市の絶対的なシンボルとなり得るものを駅前空間に創出すべきだと考える。

そこで新たなシンボル創出の適切な場所として、我々は駅東を挙げたい。というのも、現在駅東は LRT 事業の中心であり、その終着駅を宮みらい地区に建設することが予定されている。その終着駅を起爆剤とした駅東空間こそ、上記に挙げた“宇都宮市の絶対的なシンボル”に相応しいと考えるからだ。

さて、宇都宮市は“環境都市”を売りにしている。しかし西口も東口も含め、駅前空間には緑が少ない。冒頭で述べたように駅前には都市の顔なのだから、駅前空間にこそ環境都市に相応しい緑地空間を作るべきではないだろうか。確かに西口のペDESTリアンデッキの一部には緑が見取れるが、必要なのはあくまで“緑”ではなく“緑地”であると考えます。

以上を踏まえて我々は、『駅東に、LRT 終着駅と緑地空間が一体となった“宇都宮市の絶対的なシンボル”を創出すること』を提案したい。

具体的には、LRT 終着駅周辺に常緑樹を中心とした緑地空間を創出する。緑地には花壇などの比較的小さな植栽も設け、その維持管理は市民団体に担ってもらおう。そのねらいは市民団体を中心に住民が集まることで駅東が新たなコミュニティとなることである。そして、住民が駅東の緑地景観を享受できることはもちろん、コミュニティにおける人々との交流から日々の生活の楽しさを見出していくことで、最終的には、住民にとって宇都宮市が“住み続けたい宇都宮”となることを目指していきたい(＝定住人口の増加)。

定住人口はもちろん交流人口を増やすためにも、緑地空間の中には、移動車販売のカフェ（夜はバー）や、日用品販売を目的としたテナントを内部に設けた大谷石造りの建物を配置して人々の来訪目的を増やす。緑地を定期的なイベント(フリーマーケット、朝市、農産物直売所など)の開催地として利用しても良い。いずれにしるこれらが可能になれば、定住・交流人口が増加することは間違いない上、多大な経済効果も期待できる。宇都宮市の魅力は一層高まるだろう。

以上が我々の考える『**駅東の、LRT 終着駅と緑地空間が一体となった“宇都宮市の絶対的なシンボル”**』の創出である。

2 提案の目標

- ・ 駅東の公共交通を軸としたまちづくりと、緑地空間を軸としたまちづくりの融合した形である“TOD×COD”の達成。
- ・ 駅東の緑地空間という新たなシンボルの創出によって宇都宮市の魅力を高め、多くの人々が訪れたい、住み続けたい宇都宮市を目指す。

3 現状の分析と課題

- ・ 宇都宮駅を含む駅周辺空間にはインパクトのあるシンボルが無い。
- ・ 宇都宮駅東半径 1km 圏内における人口は、平成 21 年から平成 26 年 10 月末までに約 1000 人増えている。今後の宮みらい地区の開発により駅東エリアの人口はますます増加するだろう。
- ・ 宇都宮の中心市街地における緑被率は八幡山公園を含めても 10.1%（平成 22 年度）と非常に低い。特に駅周辺は緑が少なく、駅東は緑被率も 0 に近い。緑視率に関して、緑視率に比べて緑が多いと感じられる緑被率の基準は 25% 以上である。
- ・ 魅力ある都市を考えると、公共交通のアメニティだけでなく、住民の精神的なアメニティも同等に重要である。LRT 整備を考えれば、駅東に関しては公共交通のアメニティが整うことが予測されるが、精神的なアメニティとなる“人との繋がり＝コミュニティ”“憩う場所＝緑地”の部分が足りない。精神的なアメニティの補充さえできれば、駅東のポテンシャルは計り知れない。

以上から、優先的にまちづくりの対象とすべきは、今後の都市の魅力を高めていく上で高いポテンシャルを秘める駅東エリアであり、その駅東エリアの現状課題は、“緑視率を高めるかつ、魅力的な緑地空間をつくること”と“市民協働の緑地維持管理システム（市民のコミュニティ）を形成すること”だと考えられる。

4 施策事業の提案

“憩い、交流の場となるシンボリックな緑地空間”

始めに以下の例を見ていただきたい。これはフランス東部の都市ストラスブールの駅前空間である。LRT の停留所と緑地が調和した美しい駅前空間を形成している。我々の提案する駅東の緑地空間とは視覚的にこの程度の樹木の高さ、樹間、密度を想定している。この空間に植える木は一年を通して景観を維持することができるような常緑樹が適当だろう。葉が生い茂る高さに関しても人々が活動していて邪魔にならない程度のものかつ、幹が細めのものを選ぶ必要がある。ずばり駅東の緑地空間に最適な樹木はシラカシである。シラカシは剪定によって樹形、樹冠の横幅を調整しやすい特徴がある。秋にはドングリが実る。

以下より、駅前緑地空間のイメージを他の自治体の取り組みなどを例に挙げながら述べていく。ハードの面で緑地提案の中で強調したいのは以下の2点である。

(1) シラカシを植えよう



ストラスブール駅（10月5日 撮影者：吉澤）

人の交通を妨げない程度の樹間に設定。樹木より高さの低いぼんやりとした照明を緑地内に設けることで緑地内をエコに明るくお洒落な雰囲気にする。宇都宮駅東にもこのような空間があれば移動目的以外でも、駅東空間が余暇を過ごしたくなる目的にもつながるに違いない。後述にも提案するが、カフェや日用品店がこの空間に加われば、さらにアメニティの高い市民の空間になることだろう。宇都宮を訪れた人も思わず行ってみたいことだろう。駅から視認でき、歩いて行ける距離にあることが売りになるだろう。

(2) 樹木の根元には円形の花壇を



円形花壇の例（愛日緑化荘園株式会社 HP より）

シラカシの根元にこのような円形花壇を設ける。人間の活動スペースや視覚的な広さを出すために、大きな鉢などを設けるよりは円形花壇が有効だろう。全体的な統一感も出しやすい。市民団体は主にこの花壇の緑化、維持管理に関わる。何か所かの花壇は緑地維持管理に登録した市民団体以外の人々も好きな花を植えられるようにする。花を植えてくれた人には緑地内店舗で使える地域通貨を贈呈する。市民が主体的に緑化に関わる仕組みが駅東緑地空間の売りなのである。地域通貨をもらった観光客はまた宇都宮に来るきっかけにもなるし、他の人に紹介すれば緑化も進む。

(3) 屋外型カフェを設置



東京ミッドタウン “桜カフェ”

(引用 : <http://blog.magabon.jp/magablogon/?p=209>)

これは六本木の東京ミッドタウンにある桜カフェという春限定で出店する屋外カフェである。このようなテーブルだけを設けて立食式にするのも空間を無駄に使わないし、何かイベントがあるときにも大勢の客を確保できて良いだろう。また、このような店が緑地内にあれば夜にも常時人の目があることから治安悪化を防ぐ効果が期待できる。緑地内での販売を許可する代わりに各月の売り上げの何%かを“緑地維持費”を徴収する。そのお金を緑地の維持費やそれに関わる市民団体の活動費に当てる。

(4) 交通と交流がある場所で日用品を売る



カールスルーエ市内 (10月6日 撮影者: 吉澤)

LRT の停留所の横には野菜や果物を売るグロサリーストアを設ける。あえて建物を作らずに市場のような形で売るのも面白い。駅前空間を高度利用せずに緑地という主題に合わせて“つくらない贅沢”というコンセプトを含んでいる。様々なテナントを曜日ごとに設定するのも1つの案である。例えば月水金はグロサリーストア、火木土は雑貨、陶器市、日曜日はフリーマーケットのような具合である。もちろんテナントには売り上げに対して何%かの“緑地維持費”を徴収し、市民団体の維持費に当てる。緑地の発展による賑わいは売り上げにも貢献するので両者ともに得をする循環が生まれる。

【プレゼンテーションに向けて】

我々の提案は難しいことはない、簡単なものばかりである。この提案に至るまで“つくらない贅沢”というワードを常に根本に置いていた。都市の発展、アメニティの向上とは大きな商業施設や高層ビルが増えることだけではないはずだ。LRT という先進的な政策に合わせてもっと全面的に日本を引っ張る面白い取り組みを打ち出していけたら我々も“宇都宮”を誇りに思うだろう。実はまちづくりを考えていくと、結局は市民の意識の変化が必要であることが分かる。まちをつくっていくのは市民であり、各まちが集まって都市になる。市民のまち（この提案だと緑地）に主体的に関わっていく姿勢の育成こそまちづくりの第一歩であり、魅力ある都市への近道である。それを踏まえた上で、以下のデータを見てみると、宇都宮は“住む”ということに関してはそれほど困っていないことが分かる。言い換えれば“何でもある都市”と言えるだろう。そんな宇都宮に今後必要なのは“精神的な豊かさ”である。

LRT が走り高層建築物が立ち並ぶ近未来的な駅東に、シンボリックな緑地空間がある風景を想像して欲しい。数年後、都会的な駅前空間に人の賑わう風景、音がある宇都宮はとても魅力的な

都市になっていることだろう。

宇都宮市は平成 23 年 3 月に策定した第 2 次宇都宮市緑の基本計画において以下の 6 つのリーディングプロジェクトを策定している。

- (1) 中心市街地の重点的緑化
- (2) 都市の拠点の重点的緑化
- (3) 都市農地や里山・樹林地の保全と活用
- (4) 地域や場所の特徴を活かした公園や緑の維持管理
- (5) バランスある公園配置
- (6) 市民協働によって緑を守り育てる仕組みづくり

我々の提案は上記の (1) (2) (6) のプロジェクトにアプローチできる。

